

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

<https://www.jrc.or.jp>

令和4年8月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第987号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

AUGUST 2022 NO.987

8



わたしも赤十字 赤十字ボランティア

ながののぶお 長野農夫さん【P.4でご紹介】

特集

沖縄復帰から50年

米国統治下の「沖縄赤十字社」

赤十字の最新情報をSNSでチェック!



赤十字新聞 編集・発行／日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

 日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

米国統治下の 「沖縄赤十字社」

沖縄復帰から50年



*赤十字の「一国一社」の原則から、米国統治下の沖縄で、当初は赤十字社を名乗ることが許されませんでした。しかし「厚生協会」という名称で活動する中で、赤十字事業に支障をきたすようになったことから、対外的には「沖縄臨時厚生協会(後に琉球臨時厚生協会)」としながら沖縄内では赤十字を名乗ることとなりました。

INTERVIEW

当時を知る元職員に聞く「沖縄赤十字社」の活動

東京オリンピックの前年、私は沖縄から東京の大学に進学しました。高校時代に競泳をしていたので、日赤東京都支部の水上安全法の講習会に参加して、水上安全法と救急法の指導員資格を在学中に取得。大学卒業後は沖縄赤十字社に入社しました。米国統治下で沖縄赤十字社ができた当初、水上安全法などの講習は赤十字の重点事業であるとして米国赤十字社の指導者と日赤本社の安全課長が沖縄に派遣されてきました。その方々は講習指導員を養成して沖縄を離れましたが、その後に沖縄で養成された指導員は、日赤の認可する正式な資格ではないとされ、日赤への復帰後、東京で指導員資格を取った私以外に正式な指導員がゼロ、という時期もありました。

1972年5月15日、本土復帰と同じ日に沖縄赤十字社から組織が移行し、私は日赤沖縄県支部の職員に。祖国復帰は沖縄県民が長きにわたり熱望していたことで、沖縄赤十字社の職員の間では、復帰すれば我々も日本赤十字社の一員に戻れる、と、その日を待ちにしていました。復帰前も、復帰後も、赤十字の活動は全て「人を救う」ためのものです。組織が変わっても、水上安全法や救急法の講習事業は継続され、私も多くの講習で指導員を務めました。海やプールでの水上安全法の指導回数が普通の指導員よりも多いこともあって、これまで8回の事故に遭遇し、救命活動を実施。いざというときの救急法の重

1945年、日赤沖縄県支部は米軍の沖縄上陸により全ての業務を停止。沖縄における赤十字社は消滅しました。しかし、沖縄の人々の相互扶助の精神や、米国赤十字社の支援もあり、徐々に赤十字活動を再開させていきます。沖縄の赤十字、その激動の歴史をひもときます。

現在の日赤沖縄県支部の前身となる日本赤十字社沖縄委員部が発足したのは1889年のこと。その土地柄、あまたの台風に見舞われる中で沖縄県民には相互扶助の精神が培われており、赤十字の理念はごく自然に沖縄の人々の中に浸透していました。太平洋戦争末期、沖縄では激しい地上戦の結果、9万4000人に上る一般市民が犠牲に。米国統治の下、本土と切り離された沖縄で日赤支部を名乗れなかった組織は、終戦3年後に貧困者・災害罹災者の救援事業を行う「沖縄臨時厚生協会」として再出発。この民間団体は沖縄の人々を支援したい米国赤十字社と、危機的状況が続く医療や社会事業を回復させたい沖縄の人々、双方の願いの結晶でした。同協会は募金運動や慈善病院の設立に奔走、住民のために活動を続け、後に赤十字事業の趣旨を徹底するため沖縄内に限り*「沖縄赤十字社」と名乗ることとなりました。1967年、沖縄赤十字社の視察に訪れた若かりし頃の近衛忠輝名誉社長の報告書には、米国は沖縄の福祉に本土(日本政府)が干渉することを喜ばないが、日赤の協力は歓迎されたとの記述があり、「沖縄における赤十字の社会的な評価が極めて高く、住民の赤十字に対する期待が大きいことを感じた」と振り返っています。

1972年5月15日、沖縄は本土に復帰。沖縄赤十字社として活動してきた組織は日赤沖縄県支部として27年ぶりに復活を果たします。困難の中においても赤十字の精神を掲げ、たゆまぬ努力で復興の道を切り開いてきた沖縄の赤十字。寄せられた善意は、後世へと受け継がれ、今日の発展へとつながっています。



1967年、沖縄赤十字社への救急車贈呈式に参加する近衛名誉社長(中央)



大田捷夫さん

1944年2月7日生まれ。1967年、大学卒業後に沖縄赤十字社に入社。水上安全法、救急法の指導員資格を持ち、日赤沖縄県支部への移管時には事業係長を務めた。水上安全法高等科教師(当時)として九州の指導員養成にも携わる。元沖縄県水泳連盟会長。現在も安全奉仕団として、赤十字の活動に従事。



救急法の指導を行なう大田さん(右)



写真:読売新聞/アフロ

TOPICS

ムーミンの生みの親トーベ・ヤンソンと赤十字

世界各国で親しまれてきたフィンランド生まれのムーミン。8月9日(作者トーベ・ヤンソンの誕生日)は『ムーミンの日』です。長い間続いてきたフィンランド赤十字社とムーミンのコラボレーションは、その輪を世界中に広げようとしています。



© MoominCharactersLtd

日本でも老若男女から愛されているフィンランド生まれのキャラクター、ムーミン。作者のトーベ・ヤンソンと赤十字の間には、深いつながりがあります。

1945年のムーミン誕生よりも前、1930～1940年代にいちアーティストとして活躍していた若かりしヤンソンは、フィンランド赤十字社のポストカードをデザインしており、その後もたくさんのコラボレーションを重ねていきます。1964年、同赤十字社のためにムーミンとその仲間たちのイラストを制作し、子どもや若者に向けたパンフレットに掲載しました。ヤンソンはパンフレットの中で赤十字についてこう説明しています。「赤十字は、病気や空腹、孤独な人々、事故の犠牲者、戦争で負傷した人々など、困っている全ての人を助ける団体です」。赤十字の理念について深い理解を持っていたヤンソンと赤十字の絆は、読書月間キャンペーンやバレンタインデー・キャンペーンなどに引き継がれ、赤十字オリジナルのムーミンのイラストが描かれたコラボグッズが発売されると、わずか2、3カ月で多額の支援が集まり、フィンランド赤

十字社の活動の原資となりました。

1963年、同赤十字社のために描かれたムーミンのイラスト(上の図)は、学童向けのパンフレットや時間割として活用され、それらはフィンランド語とスウェーデン語の両方で発行されました。赤い花が咲き乱れる様子、ほうきを持つリトル・ミィ、はしごを登るムーミン、火を囲んで友達と過ごすスナフキンなどヤンソン独自のスタイルで描かれた親しみやすい作品です。

一見楽しそうなイラストですが、ヤンソンはムーミンの物語を通じて、孤独とは何かを掘り下げ、その予防策や克服方法についても提示しています。“Mooments of Kindness”『小さなことが大切、どんな小さな一步でも、変化をもたらすことができる』がコンセプトとなっているこのイラストには、ヤンソンが大切にした「他者への思いやり」がたくさんつまっています。

トーベ・ヤンソン(1914-2001)は「ムーミン」シリーズの作者として知られる画家、児童文学作家



© MoominCharactersLtd

わたしも赤十字

今月の表紙



赤十字ボランティア

な が の の ぶ わ
長野農夫男さん

福岡県久留米市／90歳
日本赤十字社福岡県支部
安全奉仕団救急法普及委員会顧問

**人を救う気持ちや技術を
赤十字の活動で、伝えていく**

赤十字にはさまざまな形で活動に参加する支援者がいます。
全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。

私は、これまで60年以上にわたって、水上安全法や赤十字救急法などの講習の普及に携わってきました。昭和25年に高校を卒業し、「警察予備隊(後の自衛隊)」に入隊、幹部候補生学校での水泳訓練の中に水上安全法の指導があり、そこで赤十字と出会いました。その数年後に水上安全法の指導員資格を取得しました。そこから、救急法、幼児安全法など、さまざまな指導員資格を取得して、ボランティアで赤十字の講習指導を長く務めてきました。

40歳ごろ、とある大企業で社員研修を任されていた方から誘われ、自衛隊を退官。その企業の全国の工場で、研修業務に携わります。業務中に病人やけが人が出たときに適切に対処できるよう、私が研修カリキュラムに救急法を組み込みました。良い普及活動になったと思います。

赤十字の活動で鮮明に覚えているのは阪神・淡

路大震災の被災地支援です。発災直後、福岡県支部からの要請があり、ボランティアのリーダーとして23人を連れ、トラック6台バス1台で神戸へ。初めての災害ボランティアです。派遣中、支援活動に精いっぱい取り組み、分け隔てなく人を救おうとする赤十字の理念が私の中に浸透しました。

水上安全法の指導は7年ほど前に引退し、赤十字救急法などの普及を行う安全奉仕団としては現役のつもりですが、支部は私の年齢に配慮してか、指導員の依頼をしていません(笑)。赤十字ボランティアは誰かを救いたい、役に立ちたい、そういう心を持っている。後進の方々は、その気持ちを忘れず、末永く活動を続けてほしいですね。

ボランティアへのご協力について詳しくは ⇒



TOPICS

清家篤新社長 就任のごあいさつ

支援者お一人お一人の気持ちを大切に



本赤十字社の理念は、「苦しみの中にいる者は、敵味方の区別なく救う」というアンリー・デュナンの言葉、「博愛これを仁という、仁とは人を慈しむこと」という佐野常民の言葉によく表れていると思います。その事業は「命を守り支える」に直結しているものばかりです。こうした日赤の理念や事業には常々敬意を抱いておりました。

こうした理念や事業をしっかりと継承していくことは、私たちに課せられた永遠の使命です。同時に今、私たちは大きな構造変化に直面もしてい

ます。それは少子高齢化といった人口動態、第4次産業革命ともいわれる技術革新、さまざまな分野でのグローバル化、そして地球温暖化に代表される自然環境変化といったもので、日赤の理念をそうした構造変化の下で実現するために変革も求められています。目の前の困っている人々を救うのにすぐに役立つ貢献も、将来に向けて必要な改革を行うことも、どちらも大切なことだと思います。

私はもともと労働にかかる問題を経済学で分析する「労働経済学」の研究者で、その経験から確信しているのは、どんな社会、組織にとっても「人材こそ宝」ということです。ですから、日赤の「人間を救うのは、人間だ」というスローガンには、まさに我が意を得たり、とうれしくなりました。赤十字にとって何よりも大切なのは活動を支えてくださる「人」です。赤十字の事業は世界中で1400万人以上のボランティアによって支えられ、日本でも約114万の方々が赤十字奉仕団・ボランティアとして活動しておられるというように、赤十字はまさに皆さまの人間力によって成り立っています。

また、赤十字の活動は会費やご寄付によって支えられています。これは税金や社会保険のように国の法律に従って納められるものではなく、「苦しんでいる人を助けたい」という会員、寄付者お一人お一人のお気持ちによるものです。皆さまから赤十字にお寄せいただくご支援は単なる「マネーフロー」というお金の流れではなく、温かく、ときに熱き思いのこもった、「マインドフロー」とでもいべき”気持ちの流れ“であると思います。社長就任にあたり、そのようなお気持ちを常に大切にして仕事をしていきたいと決意しているところです。



せいけ・あつし◎1954年生まれ。1978年慶應義塾大学経済学部卒業、1993年慶應義塾大学博士(商学)。慶應義塾大学商学部教授などを経て、2009年から2017年まで慶應義塾長、2018年から2022年まで日本私立学校振興・共済事業団理事長。現在、労働政策審議会会長、全世代型社会保障構築会議座長なども務める。

献血 まるわかり 辞典、

「なるほど！」と思わずヒザを打つ
“献血にまつわる豆知識”を紹介。
第5回のテーマは輸血に関するう
わさの真実に迫る「万能血」です。

vol.5



ばんのう - けつ 【万能血】

AB型=万能血説を可能にする 血漿の「成分輸血」のヒミツ

「O型は他の血液型にも輸血できる」…これは“輸血の種類”によっては正解ではありません。むしろ、「AB型だけが他の血液型にも輸血できる」、つまりAB型=万能血と呼べるケースもあります。

現在の輸血は、患者が必要とする成分で種類が分かれます。①赤血球、②血小板、③血漿、④血漿分画製剤(血漿からさらに細かく成分を抽出したもの)、⑤全血(成分を分けない血液)、の5種類があり、この中でO型が他の血液型にも輸血できるのは①赤血球の輸血です。

ABOの血液型は赤血球の表面にある抗原と、血漿の中に含まれる抗体によって決まります。赤血球表面にA抗原を持つ人が血液型「A型」で、A抗原もB抗原もゼロの人がO型です。また、抗体とは、自分にない異物=抗原に抵抗する物質で、例えばA型の人にはB抗原に反応する抗体「抗B」があります。

【抗原・抗体対照表】

	A型	B型	AB型	O型
赤血球型				
抗原 (赤血球)	↑ A抗原	↑ B抗原	↑ A・B抗原	抗原なし
抗体 (血漿)			抗体なし	

▶ 赤血球を輸血する場合は抗原を合わせる(抗原のないO型は万能)

▶ 血漿を輸血する場合は抗体を合わせる(抗体のないAB型は万能)

赤血球の輸血の場合、O型には抗原がないので、A・B・AB型の人が持っている抗体が反応しないため輸血可能ですが、血漿の輸血では状況が変わります。O型の血漿には「抗A」「抗B」の抗体があり、A・B・AB型の人の抗原が反応します。抗原と抗体(例えばA抗原と「抗A」)が体内で接触すると、赤血球が壊れる“溶血”という現象が起きてしまいます。

AB型の血漿には「抗A」「抗B」の抗体がないため他の血液型に血漿の「成分輸血」をすることが可能ですが。

しかし一方で、実際にはどの種類の輸血であっても、万全を期して、ほぼ同型同士のみで行われています。



全国

献血運動推進全国大会、3年ぶりの開催 ～秋篠宮皇嗣妃殿下が東京会場からオンラインでご臨席～

7月14日、第58回献血運動推進全国大会が愛媛県松山市にて開催されました。日本赤十字社名誉副総裁の秋篠宮皇嗣妃殿下が日赤本社に設置された東京会場からオンラインでご臨席され、東京会場では献血功労者の表彰などが行われました。

秋篠宮皇嗣妃殿下は、3年ぶりに本大会が開催できることをお喜びになられ、続けて献血協力者に対し深い感謝の意を述べられるとともに、全国で献血運動に尽力する方たちへの敬意を表されました。また、大会に先立ち県血液センターをオンライン視察された際、小学生が熱心に血液を学んでいたことに触れ「こうした活動を続けてください」と、若い世代への啓発活動を称揚されました。

体験発表では5年前に白血病治療のため多くの輸血を受け、現在は医学部で医師を目指している佐々木有未さんが闘病を振り返り「顔も知らない誰かのために献血をしてくれる人、その“真心”によって生きていられた」と感謝を語りました。



(上) 功労者を表彰される皇嗣妃殿下
(下) 本大会に際し、皇嗣妃殿下の献血運動に寄り添うお心が伝わる、手作りの布製のお花を賜りました

新潟県

世界初!ローカル5Gを使った小学生向け防災イベント

6月25日、上越市の釜蓋遺跡公園・上越妙高会場と新潟市会場にて、小学生を対象に、世界初のローカル5G回線を利用した防災イベントが開かれました。テーマは「遊びの中で防災を学ぶ」。日赤新潟県支部も焼き出し体験や防災学習などで協力。子どもたちは5Gでつながった他会場と親睦を深めつつ、先端技術に触れ、情報共有技術を災害時にどう生かすかを考えました。



「竹ひごタワー」制作で遠隔地の仲間と、協力作業の大切さを共有

群馬県

ウクライナからの避難民に 日赤の救援物資を手渡し

みどり市が受け入れたウクライナからの避難民の方々に、日赤群馬県支部の職員が救援物資を届けました。重度の聴覚障害がある4人を含めた5人の避難民の方々は、爆撃の影響で自宅に住めない状況となり、ヨーロッパ各国を経由して、前夜に来日したばかり。日本に到着することにより、川遊びを楽しむ子どもたちにも安全に水と親しんでもらうという狙いが。動画は県支部公式YouTubeチャンネルにて公開中。



国際手話通訳を介して、物資の説明や体調面の聞き取りも行った

埼玉県

安全で楽しい川遊びのために 「川の日」に啓発動画を公開

県土に占める河川面積の割合が全国2位の埼玉県。日赤埼玉県支部では、「安全で楽しい川遊びのために」と題した啓発動画を2本制作し、7月7日の「川の日」に公開しました。川のレジャー目的の観光客が増える夏休み前のタイミングで公開することにより、川遊びを楽しむ子どもたちにも安全に水と親しんでもらうという狙いが。動画は県支部公式YouTubeチャンネルにて公開中。



川の危険なポイントや、ライフジャケットの重要性を訴えています

千葉県

病院の正面玄関を彩る ボランティアによる七夕飾り

6月22日、成田赤十字病院では、毎年恒例となっている病院ボランティア会による七夕の飾り付けが行われました。新型コロナウイルス感染症の流行後、3年ぶりに入院中の患者さんに配布し、願い事を書いてもらった短冊は、ボランティア会が作成した七夕飾りと共に病院の正面玄関に設置された約3mの笹に飾られ、訪れる人の目を楽しませていました。



入院患者らの願いを込めた七夕飾りは20年以上続いている

大阪府

バーチャル防災スペース 「災育ランド」今年も公開!

昨夏、大阪赤十字病院がWEB上に構築した「災育ランド」には延べ4360人のアクセスがありました。今年は新しい動画の公開だけでなく、8月7日に防災講義や応急手当などのライブ配信も行います。コロナ禍前まで病院の一部を開放して実施していた小学校高学年向けの防災教育がベースとなったコンテンツは、老若男女が楽しめる内容。夏休み、ぜひ家族でご参加ください。



[災育ランドURL] <https://sai-iku.net/>

[公開期間] 2022年7月23日(土)～9月30日(金)

常任理事会開催報告

令和4年7月22日、令和4年度第4回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会では、会員制度の見直しを踏まえた今後の会員増強戦略について審議し、伊豆赤十字病院の地域医療連携推進法人への参加、アフガニスタン地震救援について、それぞれ報告しました。



赤十字WEBミュージアム

貴重な史料が満載 絶賛、公開中!



大分県

平成29年7月九州北部豪雨 5年経過を前に救護班訓練

核兵器禁止条約第1回締約国会議(6月21日～23日)がウィーンにて開催されました。各締約国代表に加えて、広島や長崎の被爆者も招かれ、日赤からは大分県青年赤十字奉仕団員の趙翔昊さん参加。趙さんは、赤十字ユースボランティア代表として本会議場でスピーチ。「被爆者が訴える核兵器根絶への思いを受け継ぎ、次世代へ啓発活動を続けていきたい」と発表しました。



次世代代表として条約締結の重要性を述べる趙さん(左から2人目)

赤十字はじめて物語

日本赤十字社の9つの事業 その出発点にはそれぞれの「はじまり」のストーリーがありました。

救護員育成のために赤十字病院を設立した2人の医師

現在は全国に91カ所あり、各地域の医療を担う赤十字病院ですが、そのはじめには2人の医師の救護活動への思いが強く反映されていました。博愛社(日本赤十字社の前身)創設者で医師でもある佐野常民は、西南戦争における救護員集めに大変苦労し、救護活動の難しさを痛感しました。同じく博愛社創設メンバーであり、西南戦争で官軍軍医として活躍し、陸軍軍医監となりた橋本綱常。盟友であり、志を同じくする2人の医師は、西南戦争の経験から女性救護員(看護婦)の重要性を唱え、その育成の場として1886年に博愛社病院(翌年、日本赤十字病院に改称)を開設しました。初代病院長には橋本が就任し、開院式には皇后陛下(後の昭憲皇太后)もご臨席。最先端の医療を施せるよう当時の最新医療機器を備えた同院には開院当初から多くの患者が訪れました。

特設サイトで
さらに詳しく
→→→

「赤十字病院」看護婦生徒の卒業式



1894年(明治27年)4月、「第2回 看護婦生徒卒業式」の記念写真。
前列中央の男性2人のうち、左が橋本、右が佐野

vol.5 赤十字病院

「赤十字を応援！」プレゼント

パートナー企業紹介 vol.28

フィスカース ジャパン株式会社

赤十字のために描かれたムーミン。食器の売り上げの一部が寄付に



イッタラをはじめ、ロイヤル コペンハーゲン、ウェッジウッドなどの洋食器ブランドの販売を日本で手掛けているフィスカース ジャパンは、8月9日の「ムーミンの日」に、売り上げの一部が赤十字に寄付される商品を世界一斉発売します。この商品は「Moomin by Arabia(ムーミン バイ アラビア)」として世界の人気シリーズの新作で、今回のデザインは、全てムーミンの作者トーベ・ヤンソンが1963年にフィンランド赤十字社のために描いた原画を使用しています。赤十字とフィンランドに本社を置くフィスカース社がコラボした今回の商品には『一人一人の小さな思いやりの行動がより良い世の中の実現につながる』というコンセプトが込められています。フィスカース社の担当者は「今、私たちの世界には優しさと団結力が必要です。ムーミンファミリーは思いやりと配慮を持ち、優しさの力を發揮するお手本です」と商品に込めた思いを語っています。

郵送／〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3

日本赤十字社 広報室 赤十字 NEWS 8月号プレゼント係

FAX/03-6679-0785 WEB応募／右の2次元コードからご応募ください。

8月31日(水)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

MOOMIN
by ARABIA

Moomin by Arabia
× 赤十字コレクション
マグカップ

2名さまに



ムーミンABC マグ 0.3L スナフキン
底面にはABCコレクションのロゴが入ります
© Moomin Characters 商品写真はイメージです

こちらから
応募 →
できます

WORLD NEWS

アフガニスタン地震災害



被災地を調査するアフガニスタン赤新月社職員と国際赤十字・赤新月社連盟職員

発生から1カ月、地震以前からの人道危機がさらに深刻化

6月下旬、相次ぐ自然災害や紛争による深刻な人道危機に直面していたアフガニスタンで、大規模な地震が発生しました。国際赤十字による緊急支援について報告します。

人道危機のさなかを襲った大規模地震

6月22日未明にアフガニスタン南東部で発生したM5.9の大規模地震から1カ月が経過しました。長引いた紛争による社会的混乱や干ばつによる食料難など複合的な人道危機下にあった同国ですが、このたびの地震により事態はさらに深刻化しています。

被害が大きかった地域は同国でも特に貧し



小麦粉や油、水といった食料品などの物資配布にできる人だから

い山間部で、一般的な家屋は土を固めて干しただけのレンガ造り。耐震性も低く、この地震で亡くなった方のほとんどが倒壊した家屋の下敷きになり、命を奪われました。また地震の発生は人々が寝ている時間帯だったため、逃げ遅れた人も多かったとみられています。

7月上旬までに死者1000人以上、負傷者1600人以上が報告されました。

国際赤十字が資金援助要請を拡大

アフガニスタン赤新月社では地震発生直後から迅速に支援活動を開始しました。さらに国際赤十字はアフガニスタン赤新月社と共同で被災地調査を実施し、どのような支援が必要であるかを確認して今後の支援計画を策定しました。

被災者数は25万人と推定されており、うち40%は子どもです。地震で家族を失った人も多く、こころのケアとともに、同伴者の

いない女性や子どもといった弱い立場に置かれやすい人々のリスク軽減や支援へのアクセス向上が求められています。また水や食料などの救援物資、今生きていくための現金給付、避難所の提供などの支援も必要です。中期的には家屋の修理や、生計の立て直し、保健施設の再建などハード・ソフト両面からの支援も欠かせません。数ヶ月後に訪れる極寒の冬を前に、あらゆる面での復旧が急がれます。

国際赤十字・赤新月社連盟では以前から同国の人道危機に対する緊急救援を呼び掛けてきましたが、このたびの地震を受けて資金援助の要請を拡大しています。日本赤十字社でも緊急支援として1000万円の支援援助を行い、救援金の募集を開始しました。皆さまの温かいご支援をよろしくお願ひいたします。

2022年アフガニスタン地震救援金受け付け中

皆さまの温かいご支援を
よろしくお願ひいたします。

募集期間 2022年9月30日(金)まで



<https://www.jrc.or.jp/contribute/help/2022afghan/>

近衛名誉社長、アンリー・デュナン記章受章 50年ぶりの快挙！

国際赤十字の最高の褒章であるアンリー・デュナン記章を近衛名誉社長が受章しました。その功績を紹介します。

6月22日、ジュネーブ(スイス)で「第26回アンリー・デュナン記章」の授与式が行われ、日本赤十字社名誉社長 近衛忠輝氏が受章しました。「アンリー・デュナン記章」とは個人に贈られる国際赤十字・赤新月運動の最高位の褒章で、赤十字・赤新月常置委員会により2年に一度選考が行われます。

アジア出身者では初の国際赤十字・赤新月社連盟の会長(2009～2017年)を務めた近衛名誉社長は、徹底した現場主義で知られました。就任直後から自然災害や紛争、感染症など世界各地の人道支援の現場に精力的に足を運び、世界に支援を呼び掛けるとともに、現地政府には赤十字ボランティアや職員の活動の認知と安全確保を働き掛けました。2011年に発生した東日本大震災では国際救援受け入れの統制と調整を行い、80カ国以上の赤十字・赤新月社からの支援に基づく復興事業を実現しています。また各国首脳や国連機関の長と会談を重ねる「人道外交」で、人道問題への取り組みを促してきました。今回の受章は広く世界の平和と福祉に貢献した功績が認められたもので、選考委員会の満場一致の決定となりました。日本人の受章は50年ぶり、2人目となる快挙です。



赤十字創設者アンリー・デュナンの名を記した記章

同記章は、赤十字誕生100周年を記念して1963年に提案され、1969年に第1回授与が行われました。日本人初の受章は、日本赤十字社で青少年課長を務めた橋本祐子(はしもと さちこ)さん。1971年にアジア初、そして女性としても世界初の受章となりました。



ジュネーブから届いた記章を近衛氏(左)に手渡す清家社長